# 書評 Book Review

## 『公園デビュー　母たちのオキテ』

**本山 ちさと 著**
**DHC、1995年**

平成23年の世相を表す漢字に「絆」が選ばれた。大震災や豪雨、台風などに直面し、改めて絆の大切さを知った年でもあり、新たに生まれた絆に希望を見出した年でもあった。

しかし、その一方で「絆」の多用に違和感を持つ人もいる。「ほだし」とも読む「絆」の多用は個人を束縛し、社会的な問題を個人的な関係性の中に収斂させてしまう力を生み出しはしないか、というのがその理由だ。「絆」一文字からも、いろいろ考えさせられることが多い。

この本は、地域との接点を持っていなかった筆者が、近隣の子育て中の人たちとの絆を深め、「ハハ族」の一員となっていく過程を綴った一冊である。集団のオキテや他団体との係わり方などが赤裸々に語られている。「ハハ」にとってのコミュニティの意味や、外部の人たちの視点を通じてコミュニティが抱える課題についても客観的に言及しているので、社会学的なアプローチも楽しめる。

私自身もハハとなって驚いた。赤ん坊と地域とは強力に結びつくのだという事実に。そして、その繋がりが、自治会の子ども会や、小学校PTA校外委員会へと続く出発点になっているということに。選択の余地なく地域と繋がりを持たざるを得ないという事態は、ある意味青天の霹靂だった。「公園デビュー」に戸惑う筆者が自分自身の姿に重なって思えた。

この本の中で私が特に感銘を覚えたのは、筆者の行動がきっかけとなって、公園が地域の母と子の溜り場から、地域の交流の場へと変わっていたくだりである。ハハ同士のあるやり取りから筆者は地域住民による自主的な公園の手入れに動き出すのだが、その結果ハハ族のほだしが解け、地域の緩やかな繋がりができあがるのだ。ある結びつきが、「ほだし」となるのか「セーフティネットワーク」となるかは、そのコミュニティの開放度、外部との交流度にあるのではないかと気付かされる挿話だった。

ライフステージや時代の移り変わりにより、繋がりのアンカーが「地域」となる時が突然やってくるかもしれない。この本は、実例を満載した地域でのお付き合い指南書としてもおもしろい。ぜひ皆様御一読あれ。

＜水道局経営企画課担当課長　村上佳江＞

## 『近頃の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」』

**原田 曜平 著**
**光文社新書、2010年**

編集部から、つながりに関わる「新たな問題」を提起する本を紹介したい。

1977年生まれで広告代理店に勤務する著者は、若者を対象とするマーケティング手法を開発するため、2002年、若者へのインタビューを開始する。渋谷センター街からスタートし、その後7年間で日本全国47都道府県、1000人以上の若者から話を聞く。本書ではそうして蓄積された見聞等を基に、現代の若者社会が生々しく描かれている。

この本で「若者」とは、10代半ばから20代後半くらいまでを指す。この世代は中学、高校くらいから携帯電話（ケータイ）を持ち始めた世代であり、そのことが彼らの人間関係に決定的な変化をもたらしているという。

第2章「知り合い増えすぎ現象」では、若者が「塾の友達」、「習い事の友達」、「小学校からの友達」、「地元の友達」、「隣の学校の友達」など、さまざまなグループに所属していることが紹介される。ある調査では、今の10代の所属グループ数は平均して6～7個。彼らは新しい人と出会うとすぐに、ケータイのメルアドやミクシィなどSNSのニックネームを交換する。そのため、ちょっと話す機会があるだけで友達（知り合い）が増えていく。

こうしてできた人間関係は、メルアドやSNSでつながっているために、中学から高校に進学したり、違う地域に引っ越した場合でも途切れづらい。その結果、年月を経るとともに彼らの人間関係は拡大の一途をたどり、人間関係をさばく労力が増大し、「毎週、毎月会う友達ではなく、2、3カ月に1回会う友人がたくさんいる」こととなる…。

こうした分析がどこまで若者全体に妥当であるかは分からないが、今のケータイ世代にとって、「つながり」は稀少品ではないという強い印象を与える。

今回の特集では「つながりの不足」を課題としたが、今後ケータイ世代の割合が増えていくに従い、「過剰なつながりの中で自己を見失わずに自らのネットワークをメンテナンスしていくことの支援」が社会的課題となる日がくるかもしれない。そんなことを感じさせる一冊である。

＜編　集　部＞